

品種解説：「かけはし」

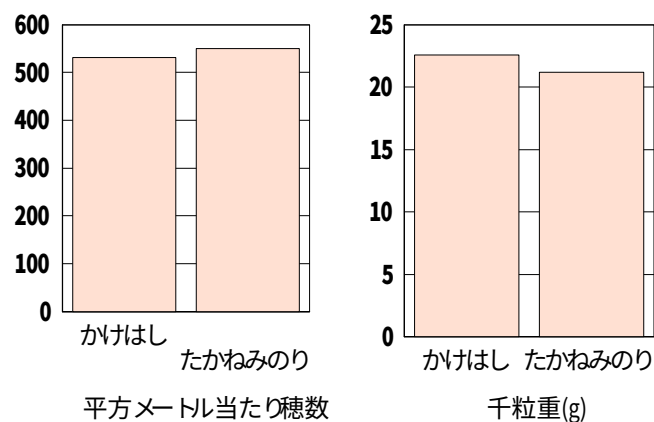
概 要：本品種の障害型耐冷性は「たかねみのり」と同程度で、“強”である。名前の意味は、“このお米が、自然と人との、人と人との、地域と地域との「かけはし」になってくれること”を表現する。

1. 来歴の概要

「コチミノリ」を母とし、「庄内 32 号」（のちの「はなの舞」）を父として、1984 年に岩手県立農業試験場で人工交配された。1991 年に「岩手 34 号」の系統名が付けられ、1995 年に「かけはし」として登録された。

2. 形態的特性

- ・ 稈 長：「たかねみのり」並み。
- ・ 穂 長：「たかねみのり」より短い。
- ・ 穂 数：「たかねみのり」並みの“偏穂数型”のうるち種である（下図参照）。
- ・ 粒 大：「たかねみのり」よりやや大きく、粒厚も厚い。
- ・ 千粒重：「たかねみのり」よりやや大きい（下図参照）。



3. 生態的特性

- ・ 出穂期・成熟期：「たかねみのり」より早く、「ハヤニシキ」並みからやや早い。育成地では“早生の早”である。
- ・ 収量性：「たかねみのり」並みである。
- ・ 耐倒伏性：「たかねみのり」並みである。
- ・ 葉いもち抵抗性：“やや弱”
- ・ 穂いもち抵抗性：“中”
- ・ 耐冷性：「たかねみのり」並みである。
- ・ 穂発芽性：“中からやや易”。

特 性	かけはし	たかねみのり
耐冷性	強	強
耐倒伏性	やや強	やや強
葉いもち抵抗性	やや弱	強
穂いもち抵抗性	中	強
穂発芽性	中～やや易	難

4. 品質・食味特性

- ・玄米の外観品質は「たかねみのり」並みである。
- ・食味は「たかねみのり」より優り、「あきたこまち」に近い“上の下”である。

5. 適地等

- ・県北部の標高が概ね 250m～350m の地帯、及び沿岸北部やませ地帯に適する。

6. 栽培法

- ・基肥窒素量は「たかねみのり」並みかそれ以下とし、多肥栽培は品質低下の原因となり、また、いもち病の発生を助長するので行わないこと。
- ・追肥は幼穂形成期重点とし、診断基準内であれば窒素成分で 2kg/10a 以内を基本とする。
- ・栽植密度は平方メートル当たり 22 株以上を確保する。
- ・刈り取り適期は登熟積算気温（平均気温）が 950-1,050 度の範囲内で、刈り遅れによる品質低下（茶米・着色米）に注意する。また「たかねみのり」に比べて粳の初期黄化が緩慢なので、玄米の登熟状況を観察しながら、黄化粳割合 80-90%を目安とする。
- ・粒が大きいので、調整は必ず 1.9mm(LL)の篩を用いること。

7. 生育診断基準

1)品質・収量安定化のための収量構成要素診断基準は次の通り。

- ・ 稈長：73～78cm
- ・ 穂数（平方メートル当たり）：470～530 本
- ・ 1 穂粒数：60～70 粒
- ・ 粒数（平方メートル当たり）：30,000～34,000 粒
- ・ 玄米千粒重：22g 前後（1.9mm：22.5g）
- ・ 登熟歩合：80%以上
- ・ 収量(1.9mm 篩使用)：540～600kg/10a

8. いもち病防除

いもち病圃場抵抗性は「たかねみのり」より弱いので、以下により防除の徹底を図る。

1)耕種的防除

- ・種子消毒の徹底と適期移植、及び育苗ハウス内や周辺に感染源となるもみ殻や藁を置かない。
- ・有機物、窒素肥料とも過剰な施用は窒素過多となり、発病を助長するので施肥基準を厳守する。
- ・補植用取り置き苗は感染源になりやすいので早期除去に努める。

2)薬剤による防除

- ・育苗期の茎葉散布を行う。

- ・葉いもちの防除は予防粒剤の施用を必ず実施し、施用時期は6月20～25日とする。茎葉散布で防除する場合は予察情報に基づき時期を失しないように注意する。
- ・穂いもち防除は必ず実施する。茎葉散布は出穂直前と穂揃い期の2回散布を基本とし、葉いもちの発生が多い場合や出穂～登熟が長引く場合には穂揃い期1週間後の防除を追加する。
- ・穂いもち対象の粒剤を施用する場合の施用時期は出穂前20～10日前とし、前記のような条件では同様の追加防除を行う。

9. 栄養診断基準

1)期待生育量である平方メートル当たり籾数を確保するための栄養診断指標は次の通り。

(1)6月下旬

- ・平方メートル当たり乾物重：40-80g
- ・稲体窒素濃度：3.4-3.8%
- ・平方メートル当たり窒素吸収量：1.5-3.0g

(2)幼穂形成期

- ・平方メートル当たり乾物重：220-300g
- ・稲体窒素濃度：2.0-2.5%
- ・平方メートル当たり窒素吸収量：5.0-6.5g

(3)穂揃い期

- ・平方メートル当たり乾物重：750-850g
- ・稲体窒素濃度：1.1-1.3%
- ・平方メートル当たり窒素吸収量：8.5-10.5g

2)幼穂形成期の稲体窒素濃度に対する葉色

葉色測定法	葉色測定値	稲体窒素濃度基準
○カラススケール	4.8-5.4	2.0-2.5%
○葉緑素計(SPAD)	38-43	〃

3)幼穂形成期の窒素吸収量基準に対応する栄養診断値（草丈×茎数×葉色）

葉色測定法	栄養診断値	平方メートル当たり稲体窒素吸収量基準
○カラススケール	1.8-2.1 x 100000	5.0-6.5g
○葉緑素計(SPAD)	1.3-1.6 x 1000000	〃

10. 栽培上の留意事項

- ・栽培法及び生育・栄養診断基準は、中苗での栽培を基本とする。
- ・催芽時間が長くなる傾向があるので、浸種・催芽を十分に行い、加温出芽を励行する。
- ・有効茎を早期に確保するため健苗育成に心がけ、初期の水管理に留意し、生育の促進を図る。また、適正栽植密度未満の疎植は穂数確保が困難な場合があり、品質低下につながることから、十分な栽植密度を確保する。
- ・いもち病対策は地域で一斉に取り組むことが望ましい。
- ・葉色の測定方法は、栽培指針の「栄養診断基準」の項目を参照のこと。
- ・栄養診断値による判定は、データ供試年次が限られているので実際の生育状況を勘案しながら行うこと。
- ・追肥の判定に当たっては、いもち病の発生状況についても考慮する。

<名称選定の理由>

- このお米は、種粳の緊急増殖を通して、沖縄県と岩手県の交流のきっかけとなったお米

です。

- 「かけはし」は虹や夢を想起させ、その一方で、力強い語感を持っており、岩手の生産者がこのお米にかける情熱と意気込みを表します。
- また、盛岡出身の国際人・新渡戸稲造の「願わくはわれ太平洋の橋とならん」にもつながり、岩手の独自性を主張しています。
- このお米には消費者のみなさんと生産者との絆として、未来を切り開いていきたいとの岩手の願いが込められております。
- このように、この米が、自然と人との、人と人との、地域と地域との「かけはし」になってくれることを期待して名付けられました。

<参考資料>

- ・県が奨励する農作物奨励品種「岩手 34 号」「岩手 36 号」
- ・平成 11 年度岩手県稲作指導指針。
- ・東北農業試験場編「平成 4 年度東北農業研究成果情報」No.7